

# AIで施設トマト

## 生育予測し 労務を管理 システム開発へ

愛媛大など

愛媛大学などは18日、人工知能（AI）が2週間先のトマトの生育を予測し、経営体の労働力に合わせた栽培管理や労務

管理ができるシステムの開発に取り組みと発表した。生育予測を基にAIが作業量を計算し、最適な作業員の配置で労務コ

ストの10%以上削減を目指す。また労働力などをみて、AIが、環境制御で生育を遅らせる判断もするという。5カ年のプロジェクトで2021年

00万円。  
今月中に、三重県の浅井農園と福井県の福井和郷のハウスで試験を始め。ハウスでは①トマトの生育情報（光合成量、果形、色など）②環境情報（温湿度、照度、かん水量など）③労務情報（作業内容、作業速度、動線など）——をAIに学習させる。

19日は、パソコンで使う園内道の設計支援プログラムを学習。マルドリ

度末までに実用化し、1畝超の大規模生産法人向けに販売する。

AIがトマトの生育を基に作業員を効率良く配置することで、過重労働を防げる。収穫が間に合

による水利設計の基礎と使う資材も学ぶ。20日は高品質生産の基礎と最近の研究動向を研修する。

農業創造プロジェクト」の一環。植物の生育を計測するシステムを手掛けるPLANT DATA（プラントデータ）、資

材メーカーの協和、生産法人など7社で取り組む。予算総額は7億50

プレ研修は、来年1月も計画。参加者の要望を把握し本研修に生かすという。

6生産法人で試験し、AIの普及性を確かめる。試験地は愛知県、高知県の3、4畝規模の次世代施設園芸拠点も含む。

体系的に研修する。

プレ研修には3日間で農家ら100人超が参加する。18日は、同機構・西日本農業研究センターの齋藤仁蔵上級研究員が、団地型マルドリ栽培（マルチ・点滴かん水同時施肥法）の導入事例を説明。マルドリの経済性とブランド化戦略を提起した。